2016 年度後期　学生授業評価アンケート集計結果に対するコメント
―文芸学部―

文芸学部長　村瀬　鋼

2016 年度後期の授業評価アンケートは、文芸学部では 471 科目を実施対象とし、実施科目数は 426 科目、実施率は 90.4%であった。これは 2015 年度後期（実施対象 461 科目中 409 科目実施、実施率 88.7%）を上回る数値である。このうち実施必須科目については対象 239 科目中 238 科目実施されており、ほぼ満足のいく仕方でアンケートが実施されていると判断してよいだろう。

集計結果については、設問 1～14 に関して、設問 14 を除けば平均値はすべて 4 点台の高水準であるのは通例のこととして、2015 年度後期と比較してすべて平均値が上昇していることが確認される。多くは 0.05 ポイント前後の僅かな上昇ではあるが、好ましいことである。そのなかでも上昇幅が大きかったのは、設問 9「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」（2015 年度 4.14→2016 年度 4.22）と、設問 14「予習または復習をよくした」（2015 年度 3.57→2016 年度 3.70）であった。これは、学部全体としてアクティヴ・ラーニングへの取り組みが進んでいることの表れであると推測され、良い傾向と言える。また、設問 10「シラバスと内容が一致していた」の上昇幅も相対的に高く（2015 年度 4.37→2016 年度 4.44）、これはシラバスに沿った授業運営という基本方針が全体的に浸透してきたことを示すものかと思われる。設問 12「総合的にこの授業を評価できる」は微増（2015 年度 4.44→2016 年度 4.46）であるが、例年そうであるようにこの数値は全学平均（2016 年度 4.35）を上回り、四学部中でも最も高い。

以上の結果から、文芸学部の授業は、おおむねのところ継続的に十分良好に運営されているばかりではなく、特にはアクティヴ・ラーニングの面などで、僅かにせよ確実に改善が進んでいると判断してよさそうである。授業評価アンケートの結果のみで教育の質を判断することはできないのではあるが、文芸学部の科目が総じて学生からの高評価を維持していることは、学部教員にとって心強いことである。文芸学部としては、この結果を参考にして、今後ともいっそうの授業改善に努めていく所存である。